

静岡挽物

挽物（ひきもの）とは、轆轤（ろくろ）を使って木をくりぬいたり、成形して作る製品をいいます。

静岡の挽物の起源は、元治元年（1864）箱根から酒井米吉が技術を伝えたと言われていいます。酒井は銘木商を営んでいましたが、箱根で足を負傷した際に助けを受けた、小田原の米穀商戸倉常治郎の紹介で箱根の挽物職人から技術を学び、今の雷神社あたりで開業したと伝わっています。

その後、志を供にする隣家酒井亀吉、同居人高橋万吉らも加わって、多くの技術者を養成するとともに、「静岡挽物」の進歩発展に寄与してきました。

先輩から挽物製作の技術指導を受けついで多くの技術者は、より研鑽努力を重ね伝統ある「地場産業」の一つとして、業界を守り育て今日にいたっています。

酒井が静岡市内で挽物業を始めた頃には、足踏式の轆轤でした。明治30年（1897）頃には、その動力に「蒸気」が使用されはじめ、明治41年（1908）頃、市内の酒井喜平が大阪から「木工挽物旋盤機」を購入し、機械化、能率化の道を拓きました。大正3年（1914）になると、主要な動力であった蒸気から「電気モーター」に変わりました。これにより近代化が大きく進むと同時に、機具・器材等も改良され、挽物技術は格段の発達をしました。

静岡挽物の特徴は、機械化が進み量産できることで、製品として、小物類や階段の手すりの丸棒などがあります。戦後は、ジョッキやコースター、胡椒ひきなどの挽物が好評を得て、アメリカに向け輸出されました。昭和40年代には、機械の自動化によって生産高も日本一となり、製品の8割を輸出するほどでした。

オイルショック以降は、国内に販路を定めて、少量生産による多種多様な製作を行っています。

現在の製造品目は、食卓台所用品、文具、玩具などの完成品と雛道具部品、家具部品、建築用部品などの半製品を製造しています。